

## 宮内庁公文書館所蔵「能面之図」に関する一考察 —狂言鷲流との関係を通して—

大谷優紀（早稲田大学）

「能面之図」は宮内庁公文書館所蔵の写本である。資料中に奥書や年紀は記されないが、巻頭に「岸九岳摹寫」の印が捺されることから、岸派の絵師である岸九岳（一八五二～一九二一）が模写したものとみられる。作中には五十一の面の図が描かれており、その大半を狂言面が占めている。面の種類は多岐にわたり、武悪面や見徳面といった通常の狂言面と並んで、牛や龍などの特殊な面が散見される。

本資料に類似する作例として、発表者は篠山能楽資料館所蔵の画卷である「能面彩色手控巻」を見出した。両者は一見して画風が似通っており、面の凹凸を強調する描き方や面紐の描写も類似する。くわえて、面が左向きで統一される点や図の右上に面に関する注記を付す点も一致する。ただし、「能面之図」が主に狂言面を扱っているのに対して「能面彩色手控巻」の図の多くは能面であり、同じ面を描いた部分は存在しない。したがって、二点の資料は共通の原本の異なる箇所を写していると想像される。祖本にあたる資料の所在は現在不明であるが、「能面彩色手控巻」の奥書に「安政歳次丙辰 / 林鐘月摹之」とあることから、原資料は安政三年（一八五六）六月以前に制作されたものと考えられる。

図はいずれも細部まで描きこまれており、実在の面を写したことが窺われるが、資料中には手本となった面についての情報はほとんど記されていない。これに関して、「能面彩色手控巻」中の「赤色 / 三番叟 / 仁」と題された翁面の図がひとつの手がかりとなる。明和八年（一七七七）の書上をもとに能楽諸家の所有面について記した『諸家面目録』をみると、「赤色」と称する面が鷲仁右衛門の所蔵品にあることがわかり、ここから、図に付された「仁」の文字は狂言鷲流の宗家を務めた鷲仁右衛門を示すと推測されるのである。同様に、面の名称の一致や現存する作例との類似から、「能面之図」にも鷲流に関わる面の図が複数含まれていることが確認できる。その中には、これまで文字資料によって名称しか知られなかった面や、鷲流に固有のものと考えられる面も含まれることが判明する。

鷲流は狂言の流派のひとつで、江戸初期に成立し幕府の取り立てを受けて隆盛を誇ったが、明治期の能楽衰退の中で廃絶に至った。宗家が断絶していることから、記録や情報が十分に残されているとはいえ、特に鷲流で使用された狂言面についてはこれまでほとんど言及されてこなかった。前述のように、二点の資料の原本の制作時期は江戸期以前と推測され、同時代の鷲流所蔵面の姿を写している可能性が高い。「能面之図」には他に類を見ない造形の面の図が多数収録されており、鷲流の芸風や演出を考える上でも貴重な資料となると考えられる。本発表では資料を手がかりにして、同流の狂言面の特徴や他流との違いについても言及を試みたい。